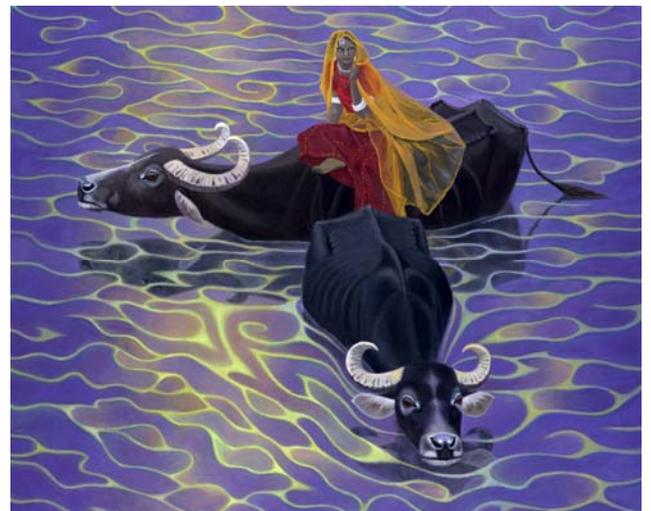


ポーラ美術館の

Mineral Colors, Myriad Images : Nihonga from the Collection

日本画



- 1期 2010年3月13日(土)～6月8日(火)
杉山寧 不朽の名作 《水》を中心に
- 2期 2010年6月11日(金)～9月5日(日)
杉山寧 晩年の大作 《洗》を中心に

【報道に関するお問い合わせ】

ポーラ美術館 広報事務局 TEL 03-3575-9823 / FAX 03-3574-0316

ポーラ美術館、開館以来、初の日本画展を開催！

日本最大級の杉山寧のコレクション全 43 点を一挙公開

財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館（神奈川県箱根町）は、2002 年の開館以来、初の日本画の企画展となる『ポーラ美術館の日本画』を開催します。

ポーラ美術館のコレクションは、ポーラ・オルビスグループのオーナーでありました鈴木常司（1930～2000）が 40 年以上にわたり収集した個人コレクションです。そのコレクションは印象派を中心とした西洋絵画、日本の洋画、日本画、東洋陶磁、古今東西の化粧道具など 9,500 点を超えます。これまで企画展では、西洋絵画、特に印象派の絵画を中心に構成してまいりましたが、企画展『ポーラ美術館の日本画』では、初公開作品を含めて、ポーラ美術館の日本画コレクションを総覧し、コレクターの眼をあらためて見直します。そのなかでも昭和を代表する画家であり、高山辰雄、東山魁夷とあわせて「日展の三山」として知られる杉山寧（1909～1993）の収蔵作品 43 点は、日本でも最大級のコレクションです。

本展では、日本画の近代化に尽くした横山大観（1868～1958）、叙情的な作風で人気の高い東山魁夷（1908～1999）、人間の精神性を追究した高山辰雄（1912～2007）、平山郁夫（1930～2009）などの作品から、コレクターの目を通して、写実と抽象、洋画のように見える厚塗りのマティエールなど戦後の日本画における重要な問題について考えます。それは、現代日本画家の造形上の実験と今後につながる可能性を、今あらためて捉えなおすことにつながるでしょう。

本展は、作品保護のため、2010 年 3 月 13 日（土）から 6 月 8 日（火）までを 1 期、2010 年 6 月 11 日（金）から 9 月 5 日（日）までを 2 期として、1 点を除き、全作品を入れ替えます。現代日本画への序章となる第 1 部「横山大観とその周辺」、コレクターが最も力を入れて収集した杉山寧を特集する第 2 部「杉山寧『純粹絵画』への道」、第 3 部「東山魁夷と日本画の叙情」、第 4 部「平山郁夫 源流を求める旅」の 4 つのセクションから構成されます。

【表紙作品：1 期・広報用メイン作品】

杉山寧 《水》

1965 年（昭和 40）

麻布彩色/額装、147.3 x 227.3 cm

【表紙作品：2 期・広報用メイン作品】

杉山寧 《光》

1992 年（平成 4）

麻布彩色/額装、180.0 x 220.0 cm

『ポーラ美術館の日本画』 開催概要

- 展覧会名 : ポーラ美術館の日本画
Mineral Colors, Myriad Images : Nihonga from the Collection
- 開催期間 :
1期 2010年3月13日(土)～2010年6月8日(火)
杉山寧 不朽の名作《水》を中心に 横山大観、東山魁夷、高山辰雄、平山郁夫など全13作家
2期 2010年6月11日(金)～2010年9月5日(日)
杉山寧 晩年の大作《洗》を中心に 横山大観、東山魁夷、高山辰雄、平山郁夫など全14作家
※ 作品保護のため、1期・2期で全作品を入れ替えます。
- 作品点数 : 127点(収蔵作品118点、特別出品9点)
- 主催 : 財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
- 会場 : ポーラ美術館 展示室1
〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285
Tel. 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108
ホームページ <http://www.polamuseum.or.jp>
- 開館時間 : 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 休館日 : 会期中無休
ただし、6月9日(水)、10日(木)は企画展示室は休室し常設展示室のみ開室
- 入館料 :

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

※料金はいずれも消費税込み。

※中学生・小学生の入場については、土曜日は無料です。

※中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生及び引率教員等の入場は無料です。

【担当学芸員によるギャラリートークのご案内】

展覧会の見どころを美術館講堂及び展示室でご紹介します。

第1回 3月27日(土) 第2回 4月24日(土) 第3回 5月29日(土)

第4回 7月10日(土) 第5回 8月19日(木)

14:00～15:00/先着30名様まで。当日美術館講堂に集合(無料、当日の入館券は必要)

「ポーラ美術館の日本画」の見どころ

1 ポーラ美術館では初めての日本画展。

文化勲章受章作家を中心とする 14 作家の約 120 点を展示。

1 期・2 期で作品完全入れ替えの大規模展覧会。(各期約 60 点ずつ展示)

約 160 点所蔵している近・現代日本画のなかから約 120 点を一挙公開します。西洋絵画、とくに印象派のイメージが強いポーラ美術館ですが、本展をご覧くださいとすることで、多彩なコレクションであることがわかり、ポーラ美術館の新たな魅力を発見していただけるはずです。全 14 作家のうち 12 作家が文化勲章受章作家であり、日本画壇の最高峰に立った画家たちの作品を通して、近・現代の日本画の流れをたどることが出来る展示となっています。

2 日本最大級の杉山寧コレクション 43 点を一挙公開。

エジプトに取材した《水》(1 期展示)、インドに取材した大作《光》(2 期展示)は必見。

日展の三山のひとりであり、抽象的な背景と克明に描かれたモチーフによる独自の画面を作り上げた杉山寧(1909-1993)。中期から最晩年までの代表作を集めた当館のコレクション 43 点は国内最大級のもので、杉山寧の大規模な展示は、1996 年(平成 8)に日本橋高島屋ほかで開催された「杉山寧展—永遠の造形を求めて」以来です(1 期・2 期で展示替あり)。

3 2009 年に逝去した平山郁夫の作品 17 点を展示。

昨年逝去した平山郁夫(1930-2009)は、シルクロードを主題にした作品で知られ、また文化財保護運動など社会活動でも多大なる功績を残しました。本展では展覧会の最後のセクションを平山郁夫のコーナーにあて、計 17 点を展示します(1 期・2 期で展示替あり)。ポーラ美術館が収蔵する絵画のうち最大サイズの《イラン高原に行く》(1995 年、横 3.6m)は、1・2 期通期展示いたします。

4 横山大観の幻の名画を公開。

横山大観(1868-1958)が 1940 年(昭和 15)に発表した「海山十題」連作。展示即売された売り上げは軍用機購入資金として陸海軍に寄附されました。大観畢生の名画と言われた作品でしたが、20 点の絵画はその後流転の運命をたどりました。本展では、当館が収蔵する《山に因む十題のうち 霊峰四趣 秋》を公開します。(本作品は 2 期のみ展示となります)

5 長野県信濃美術館 東山魁夷館より特別出品。

「国民的画家」と呼ばれるほど人気の高い東山魁夷(1908-1999)。叙情的な画風でヨーロッパ風景を描き、日本画に新風を吹き込みました。本展では、国内最大の東山魁夷コレクションを誇る長野県信濃美術館 東山魁夷館より本画、習作 9 点を特別出品していただきます。(作品保存のため会期中 4 回の展示替を行ない、常時 2-3 点を展示いたします)

第1部 横山大観とその周辺 — 現代日本画へ至る道

日本画では、富士山や梅、桜などの伝統的な主題を取り上げ、技法においても輪郭線を用いるなど一定の規則が重視されてきました。明治期に日本にもたらされた「西洋画」に対して、「日本画」という言葉が生まれて以降、画家たちは洋画とのせめぎあいの中で、日本画における写実の問題に対峙してきました。横山大観（1868-1958）が試みた没線描法は、伝統的な日本画に欠かせなかった輪郭線をぼかすもので、西洋の「空気遠近法」に倣ったものでした。しかし、この新しい技法は見慣れない描写に抵抗をもった評者から「^{もうろうつたい}朦朧体」と揶揄されます。大観は東京美術学校を辞した岡倉天心の理念に従い、在野団体として1898年（明治31）日本美術院を創設し、後進の育成と日本画の近代化に努めました。



1期 広報用作品 No.2
横山大観 《不二霊峰》
1940年代
紙本彩色/額装、69.5 x 90.6 cm

小林古径（1883-1957）、安田靉彦（1884-1978）、前田青邨（1885-1977）は、1914年（大正3）に再興された日本美術院展を発表の場とし、日本画における「新古典主義」を確立した画家たちとして1930年代頃から「再興院展の三羽鳥」とも呼ばれました。いずれも歴史画家としてゆるぎない評価を得ていた彼らは、伝統的な主題を取り上げ、技法においても伝統を踏襲する一方で、大胆に分断された構図を用いたり、時には抽象絵画のような表現を取り入れるなど、近代的な展示空間にふさわしい日本画のモダニズムを模索しています。



2期 広報用作品 No.6 小林古径 《柿》
1934年（昭和9）
絹本彩色/額装、48.3 x 72.5 cm

◆横山大観の幻の名作、《海山十題》のうちの1点、《靈峰四趣 秋》を収蔵

「海に因む十題」、「山に因む十題」からなる「海山十題」と呼ばれる連作 20 点。これらは、横山大観が、71 歳の 1940 年（昭和 15）、みずからの画業 50 年を記念して描きました。この年が皇紀二千六百年にあたることから、新作であるこれら 20 点を 4 月 3 日から 7 日までの 5 日間、「海に因む十題」を東京・日本橋の三越、「山に因む十題」を東京・日本橋の高島屋の二会場に分け展覧、その後大阪でも展示しました。展覧会に先立つ内示会で既に全点が完売し、1 点 2 万 5 千円の売り上げ合計 50 万円は、会期中、陸海軍にそれぞれ 25 万円ずつ献納されました。展覧会終了後、陸軍の爆撃機・戦闘機 4 機に「大観号」と名づける献納命名式や海軍への献納式が行われました。その後これら 20 点はそれぞれに所蔵先を変え、あるものは所在不明となり、“幻の名画”と呼ばれ続けます。軍用機購入資金を寄付するために描いた連作「海山十題」。ポーラ美術館には、そのうち「山に因む十題」の《秋》が収蔵されています。



2 期 広報用作品 No.7

横山大観 《山に因む十題のうち 靈峰四趣 秋》

1940 年（昭和 15）

紙本彩色/額装、74.6 x 110.4 cm

本作品は、「山に因む十題」の中で「秋」を描いており、10 点の中で最も色彩ゆたかな作品です。前景に白砂と青い流水、中景にすすき、おみなえし、ききょう、紅葉などの秋草と青松を、そして後景に富士を配した構図で、日本の秋を象徴する風物を織り込み、理想郷を作り上げています。白い綿のような穂を揺らしているすすきの柔らかな質感が印象的であるほか、すすきの原の間に点々と顔をのぞかせるおみなえしの黄色、ききょうの紫、紅葉の朱色が華やぎと彩りを加え、琳派風に装飾化された流水の群青も鮮やかに目にうつります。最も後ろに描かれた富士は初雪を冠し、稜線はすっきりと描かれ、清澄とした靈峰の存在感を強めています。なにより、遠近法に則らない空間表現がこの作品の様式的な美しさを際立たせており、大観自身「ほんとうの芸術は遠近法では出来ません。それを超越したところから芸術は出来るので、遠近法に縛られては出来ません」と語っています。

第二次大戦は、画家たちの活動に大きな影響を与えました。杉山寧は戦中に肺結核を患い、長期間にわたり制作の中断を余儀なくされました。東山魁夷は両親と兄弟のすべてを病により失い天涯孤独の身となります。平山郁夫は広島で被爆しています。戦後の現代日本画家たちの活動には目を見張るものがありますが、その影には、戦争の悲劇と、戦前の時代との断絶があったのです。

第2部 杉山寧 「純粹繪画」への道

コレクター・鈴木常司が最も力を入れて収集した杉山寧（1909–1993）の作品43点は、質・量ともに日本有数のコレクションです。本展覧会は、作家没後の1996年に回顧展が開催されて以来の杉山寧の作品をまとめて紹介する本格的な展覧会となります。

本セクションではコレクションから初公開作品を含む43点を展示し、杉山寧が「純粹繪画」と呼んだ、画業の到達点への道のりをたどります。

東京美術学校在学中に帝展（帝国美術院展覧会）に入選し、さらに主席で卒業した杉山は、新進気鋭の若手画家として華々しく画壇にデビューしました。高山辰雄らとともに結成した「^{るそうがしや}瑠爽画社」を経て、伝統的な大和絵に縛られない新しい日本画を模索した杉山は、抽象繪画の制作にのめりこみ、画肌がまるで油彩画に見えるような描き方を編み出し、伝統的な「日本画」の概念を覆すような活動を始めます。

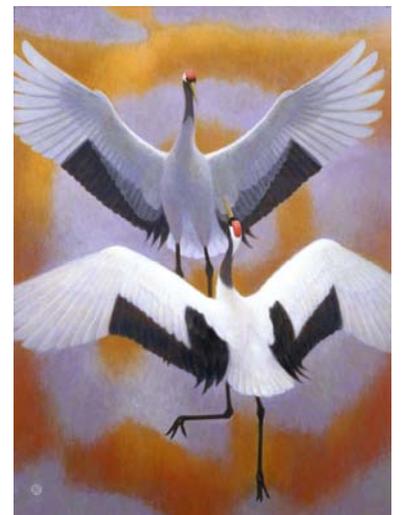
やがて杉山は、色面構成のように抽象的なモチーフを組み合わせさせた背景に、細密に描写した花鳥を配する独自の画風を打ち立てます。写実に戻るのではなく、抽象を温存してその上に写実を加える、二重構造の新たな画風を生み出したのです。その姿勢は「造形主義」と評されました。

「日本画」の明治から昭和にかけての変遷を振り返れば、日本画家たちは常に「写実」をめくり葛藤と試行錯誤を繰り返していたといえます。しかし、執拗に描きこまれた細密描写は、ときに閉塞感を伴うものでした。写実は突き詰めれば息苦しくなる。その息苦しさに風穴をあけるために杉山は抽象を加味してバランスをとったとも言えるのです。そういった意味で、杉山寧の作品は突然変異ではなく、写実を追究した日本近代繪画の100年の歴史のうえに立脚しているといえるでしょう。



杉山寧 《薫》

1975年（昭和50）
紙本彩色/額装、78.6 x 103.3 cm



杉山寧 《舞》

1968年（昭和43）
麻布彩色/額装、100.1 x 72.7 cm

私は画学生のころ、「純粹繪画」という言葉に強く心ひかれたものである。「繪画」だけでなく表現できないものを求めて、歩いて来たといえるかもしれない。それゆえ、私は画面から情緒的な要素を排除するように努めた。また文学的な要素も、とりのぞいた。私の作風を造形主義と呼ぶ人がいるのは、そのためであろうが、その純粹さを求めて、私は仕事をする。

（杉山寧 『画作の余白に』 美術年鑑社、1989年より）

コラム 「悠久の歴史への憧れ」

◆ 《水》 (表紙作品 1期メインビジュアル)

1962年(昭和37)のエジプト旅行後、杉山はエジプトをモチーフにした作品を描きました。横幅2mのこの大作もその1点。画面のほとんどを占める紺碧の水は、ゆったりと悠久の時を流れるナイル河です。その前を黒い衣服を着た女性が頭に甕を乗せて立っており、背景の青と黒い衣服の色彩の対比が印象的です。灼熱の大地での水汲みは厳しい自然のなかで生きる人間の営みですが、エジプトで杉山が目にした光景は、スフィンクスやピラミッドなどの古代遺跡だけでなく、その歴史のなかに生きる人々の暮らしであったのかもしれない。

◆ 《光》 (表紙作品 2期メインビジュアル)

1992年(平成4)の「杉山寧の世界」展で発表された最後の大作。晩年、杉山はインド・ラジャスタン地方に行き、その旅行をもとに本作品や《沙》などを残しています。《光》で水牛にのる女性は、インドの女の子ですが、帰国後、孫娘に衣装を着せポーズをとらせてモデルにしました。青みを帯びた紫色の水面に、きらきらとゆらめく黄金色の波が描かれ、その色彩のコントラストが水の輝きを強調しています。水のなかにゆったりと身をおく2頭の水牛の縦横に交わる配置、その中心に乗る少女・・・構成と色彩のすべてにわたる緻密な計算と確かな絵画技法を結実させた杉山芸術の到達点ともいえる作品です。



杉山寧 《光》
1990年(平成2)
麻布彩色/額装、60.4 x 80.5 cm

◆ 《究》

1981年(昭和56)72歳のとき二度目のトルコ旅行をしたときの作品。この年、8月上旬から9月上旬にかけて杉山はカッパドキアを訪れ、ギリシアを経て帰国しました。トルコ、アナトリア高原に位置するカッパドキアは、4~5世紀頃より原始キリスト教の修道士が集まり、険しく切り立った岩山に数多くの洞窟寺院が造られました。杉山は、この洞窟寺院のある「カッパドキアの赤い谷」に強い関心を寄せ、何度も描いています。

見渡す限り、林立した円錐形の巨岩が白、黄土色、桃色、紫色と様々に変化を持つ風景は、現実を越えた世界へ入ったようで、かつ、そこに昔の人の生活が感じられることは、夢の中のような、不思議な興奮を覚えます

(「新春対談 杉山寧・鈴木進 古代文明のロマンに魅せられて」『三彩』1984年1月号より)



杉山寧 《究》
1981年(昭和56)
麻布彩色/額装、73.1 x 54.9 cm

特集：杉山寧とその周辺

【特集1】日本画の革新—瑠爽画社の仲間たち：高山辰雄、山本丘人

「^{る そう がしや}瑠爽画社」とは、東京美術学校で^{まつおかえいきゆう}松岡映丘門下にいた若手画家たち、杉山寧、高山辰雄（1912-2007）、山本丘人（1900-1986）らが卒業後の1933年（昭和8）春に結成した団体です。彼らは、歴史風俗画主体の大和絵の伝統に縛られない「新日本画の創作」を期待されていました。歴史画家として著名であった師の松岡映丘自身が新傾向の日本画を期待していたというところから、当時の日本画壇が行き詰まりを感じ、新機軸を打ち出したいと模索していたことが分かります。この会は、師であった映丘の死、杉山寧の肺結核の悪化などにより、1940年（昭和15）半ば解散しますが、メンバーのその後の活躍にはめざましいものがあります。



1期 広報用作品 No.3 高山辰雄 《夜明けの時》
1972年（昭和47）
紙本彩色/額装、73.2 x 116.2 cm



2期 広報用作品 No.8 高山辰雄 《道》
1970年（昭和45）
紙本彩色/額装、65.0 x 91.8 cm

道は思いもよらない美しい形をして千変し、どんな形もあり、深い何かを感じるのです。（中略）
歴史のある道も歴史上の人とはともかく、名のない人、庶民の足跡の方にひかれます。

（高山辰雄「画家の言葉3」『芸術新潮』1975年10月号より）

【特集2】日本画における抽象—徳岡神泉、福田平八郎にみる

第二次大戦後、ヨーロッパやアメリカでは、絵画における抽象表現が花ひらきます。フランスでは1950年、批評家のミシェル・タピエにより「アンフォルメル（非定形のもの）」と名づけられました。一方、アメリカでは「抽象表現主義」と呼ばれ、ひとつのグループをなします。

同じころ、日本画壇でも、先進的な表現を用いる二人の画家が登場しました。ともに京都を活動の中心としていた徳岡神泉（1896-1972）と福田平八郎（1892-1974）です。「半抽象」といわれる二人の作品は、草花や小動物など日本画の伝統的な画題を、なかば現実から遊離したような背景のパターン上に配置するもので、平八郎については「装飾的」、神泉については「象徴的」と評されました。特集2では、杉山寧の絵画にも通じる、これら二人の画家の抽象への志向を検証します。



徳岡神泉 《池》
1968年（昭和43）
紙本彩色/額装、44.0 x 63.8 cm



福田平八郎 ^{くおしどり}《鴛鴦》
1963年（昭和38）、紙本彩色/額装、44.1 x 61.8 cm

コラム

◆ コレクターの杉山寧への思いとは？

ポーラ・オルビスグループのオーナーでありました鈴木常司は、モネやルノワールなど印象派、それに続くピカソやマチスなど20世紀絵画を中心とした西洋絵画を数多く収集しました。「印象派」はそれまでの西洋の伝統的な主題を離れ、身近な人々の日常風景を画題に取り上げ、屋外で制作するなど、それまでの絵画の流れを一変させたグループです。作風がめまぐるしく変化したピカソも、キュビズムを創始させるなど、革新的な画家であり、同時代を生きたマチスは線を単純化させると同時に色彩を重んじ、「色彩の魔術師」といわれるなど美術の流れを変えました。コレクターは、因習を打破して新しい流れを作った先進的な画家に魅かれるところがあったようです。

杉山寧は、画題や構図、時には師弟関係など、伝統や因習を重んじる日本画の世界で、抽象表現や油絵のようなマティエールを取り入れるなど、日本画の枠を越えようとした画家でした。またエジプトやインドなど、当時の日本人からみれば遠い異国の地に足を踏み入れ、そこで目にしたものを描いた杉山寧の生き方にも、コレクターは何か感じるものを持っていたのかもしれませんが。

第3部 東山魁夷と日本画の叙情

今や「国民的画家」と呼ばれるほど日本人に愛されている 東山魁夷 (1908-1999)。その名前を聞いただけで、北欧の針葉樹の緑や、湖畔の情景、白馬のいる風景など具体的な作品のイメージが浮かぶでしょう。画家としては遅咲きであった東山は、生来、寡黙で控えめな人物であり、哲学的思考をめぐらせながら静かに作品に向き合い、うつろう自然の一瞬の輝きを描きつづけました。その作品は、まるでおとぎ話の一シーンのように叙情的であり、ありのままの自然を超越した崇高さを獲得しています。第1部で取り上げた画家たちの画題はほとんどが国内に取材したものであったのに対し、東山は初めて海外にまとまった取材を行い、シリーズとしてヨーロッパ風景を描いた日本画家でもあります。

第3部では、国内最大の収蔵品を誇る長野県信濃美術館 東山魁夷館の作品とともに、東山魁夷を中心に据え、現代日本画家にとっての「叙情」と「異国趣味」について考えます。



54歳の東山魁夷が妻とともに旅した北欧での取材による作品。本作品は、デンマークのリーベという町に立ち寄った際に見た町並みです。4つの窓と扉、雨どいのある、ごく普通の民家を正面からとらえています。また、この明らかな塗り重ねは油彩画風の重厚なマティエールであり、壁の質感を伝えるために東山が試みた厚塗りの描法であったことがわかります。学生時代のドイツ留学以来しばらく目にしていなかったヨーロッパの石の文化は、深く問いかけるように東山の心に響いたのでしょう。

2期 広報用作品 No.9

東山魁夷 《リーベの家》

1963年(昭和38)

紙本彩色/額装、60.4 x 81.2 cm



爽やかな緑の森と、澄み切った湖の風景。水に映る森は上下相称をなし、まるで画面全体に森が広がっているかのような錯覚にとられます。画面を見つめていると、ふっと森の奥から白馬が現れそうな気配もします。多くの人が東山魁夷と聞いて思い浮かべる典型的な構図とモチーフによる、叙情的な風景画です。本作品はおそらく北欧に取材したスケッチをもとに描いたと思われる晩年の作品で、1960年代から最晩年まで一貫して、東山が森のテーマに取り組んできたことがうかがえます。

1期 広報用作品 No.4 東山魁夷 《緑の湖畔》
1991年（平成3）
紙本彩色/額装、54.2 x 73.2 cm

コラム

◆ 東山魁夷と北欧

1962年（昭和37）に訪れた北欧は東山がずっと憧れていた地であり、旅してみると想像していたとおりの風景がひろがっていたと語っています。それ以来、北欧を思わせる自然観照は東山の心象風景と重なり、たびたび作品に表れることとなります。そこに共通するのは、北欧の凍てつく空気を感じさせる透明感のある色彩、針葉樹の鋭い形態、そして水に景色や物体が逆さまに映りこむ上下相称の構図です。

第4部 平山郁夫 源流を求める旅

1945年（昭和20）8月6日、中学三年生であった平山郁夫（1930-2009）は、広島市の陸軍兵器補給廠で勤労中に原子爆弾の投下にあいました。防空壕にいたため直接の被爆は免れましたが、市内を歩いて避難し多量の放射能を浴びます。そして原爆の後遺症は、東京美術学校に進んだ後も、平山を苛みつづけるのです。死の影に怯えながらも、若き画家は「一点でも納得のできる作品を描き上げたい」と制作を続けます。苦悩のなかで平山は、広大な砂漠をさまよう苦行僧—18年にもわたる長旅の末、仏教の原典をインドから中国に伝えた玄奘三蔵—の姿を思い浮かべるようになりました。

「仏教伝来」とシルクロードを舞台にした日本文化の「源流遡行」という主題が、画家のライフワークとして確立したのです。平山郁夫の作品には、主題に加えて色彩にも大きな特徴があります。

「金と群青の対比」です。

私の絵は、青や緑、金色が、色彩の土台にあるといわれることが多いのですが、それはこれらの色が私にとっていちばん馴染みぶかいためでしょう。（平山郁夫『日本画のこころ』講談社、1995年、22頁より）

故郷である瀬戸内の生口島。そのまばゆい陽光の金色と海の青が、画家に大いなる啓示を与えたのです。

本業以外の仕事が忙しくても、毎日わずかでも筆をとるよう、私は自分に課してきました。

(前掲書、143 頁より)

と語る平山は、日本美術院の理事長など様々な要職に就きながら精力的に制作と発表を続けました。第4部では、ポーラ美術館が所蔵する絵画のなかでも最も大きな作品である《イラン高原に行く》(1995年院展出品作)に至る平山の作品を展覧しながら、日本画における「主題の源流遡行」について考えます。